

9月1日は「防災の日」 防災について考えよう

近年、台風や豪雨による風水害や突風などが各地で発生しています。平成25年10月の台風26号では、本市においても、暴風雨により、389ミリと今まで経験したことのない雨量を記録。多数の家屋や農産物に対する被害、道路・河川をはじめとする社会資本の損壊など、甚大な被害が発生しました。

9月1日は防災の日。「いざ」というとき、自分の身を守るために、私たちにもできる防災をもう一度見直し、避難行動や備蓄品を再確認して、風水害や地震などの自然災害に備えましょう。

水害・土砂災害に備える（防災気象情報が5段階に整理されました）

水害・土砂災害の防災情報の伝え方が変わりました。「警戒レベル」を用いて、避難のタイミングをお伝えします。市町村から「警戒レベル3、4」が発令された場合、速やかに避難してください。

<避難情報等>			<防災気象情報>	
警戒レベル	避難行動等	避難情報等	【警戒レベル相当情報(例)】	
警戒レベル5	既に災害が発生している状況です。命を守るための最善の行動をとりましょう。	災害発生情報 ^{※2} <small>※2 災害が実際に発生していることを把握した場合に、可能な範囲で発令（市町村が発令）</small>	警戒レベル5相当情報 氾濫発生情報 大雨特別警報 等	
警戒レベル4 全員避難	速やかに避難先へ避難しましょう。公的な避難場所までの移動が危険と思われる場合は、近くの安全な場所や、自宅内より安全な場所に避難しましょう。	避難勧告 ^{※3} 避難指示(緊急) <small>※3 地域の状況に応じて緊急的又は量な避難を促す場合に発令（市町村が発令）</small>	警戒レベル4相当情報 氾濫危険情報 土砂災害警戒情報 等	
警戒レベル3 高齢者等は避難	避難に時間を要する人(高齢の方、障害のある方、乳幼児等)とその支援者は避難をしましょう。その他の人は、避難の準備を整えましょう。	避難準備・高齢者等避難開始 (市町村が発令)	警戒レベル3相当情報 氾濫警戒情報 洪水警報 等	
警戒レベル2	避難に備え、ハザードマップ等により、自らの避難行動を確認しましょう。	洪水注意報 大雨注意報等 (気象庁が発令)	これらは、住民が自主的に避難行動をとるために参考とする情報です。	
警戒レベル1	災害への心構えを高めましょう。	早期注意情報 (気象庁が発令)		

(国土交通省、気象庁、都道府県が発令)

地震に備える





今年の梅雨に入って以降、テレビや新聞などで「警戒レベル3相当」とか「警戒レベル4相当」といった言葉をよく目にするようになりました。これは、大雨による洪水や土砂災害から身を守るために自らがとるべき行動を直感的に理解しやすくなるように、国が5段階の警戒レベルを明記して防災情報を提供することとなったためです（このことは、市報7月号と一緒に配布したチラシでお知らせしています）。

「避難」行動は、洪水や土砂災害だけでなく、地震が発生した場合でも判断して行動しなければなりませんし、いざという時に的確な避難行動がとれるかどうかが重要になります。

「自衛隊防災BOOK」という本が市販されているのですが、これは自衛隊の協力のもと、防災に役立つ情報が気軽に読めるように構成されたもので、「なるほど!」と思う情報やアイデアが盛り込まれています。その中から「避難」をキーワードとしたいいくつかの情報・アイデアをご紹介します。

○自宅の周りの避難場所を知っておく

→ ハザードマップを見るだけでなく、年に1回は実際に歩いてみる。

○外出先では、非常口、非常階段の位置を把握する

→ 外出先でエレベーターが使えない場合、唯一の避難経路になるのが非常口・非常階段。

○エレベーター内で強い揺れを感じたら、全ての階のボタンを押す

→ 止まった階で降り、あとは階段で移動。

○就寝中に地震が発生したら、寝室のドアを開ける

→ 迅速に開けないと、揺れて建物が歪み、開かなくなる恐れがある。スリッパなどを履いて、足をけがから守ることも大事。

○避難時の服装は、真夏でも長袖&長ズボンを着用する

→ けがをしないように肌を守る。

○赤ちゃんを連れて避難する場合は、ベビーカーは危険

→ 赤ちゃんはおんぶひも、非常用リュックは前方で背負い、両手は空けておく。

○高齢者と避難する場合は、手をつなぎ、声掛けをしながら慌てず落ち着いて誘導



このほか、自宅周辺の「普段の状況」をよく知っておくことも重要です。例えば、近くを流れている水路の深さや雨が降った時の増え方、道路の高さや雨が降った時の水のたまり方とかをよく知っておくと、大雨が降った時に危険になりやすい箇所がどこなのかを把握でき、避難する際に役立ちます。

大雨による洪水や土砂災害、地震発生など、いつ何時大きな災害が発生するとも限りません。一人一人が「自らの命は自らが守る」という意識を持ち、災害に備え、行動しましょう。

赤ちゃんがいるご家庭へ

行方市消防団女性部長 海老澤 文江

女性消防団員の目線から、赤ちゃんがいるご家庭にちょっとしたアドバイスを。

今年の3月から4月にかけて、乳児用の「液体ミルク」が、大手乳業メーカー2社から発売されました。これまで国内で液体ミルクは承認されていませんでしたが、2016年4月に発生した熊本地震で、被災地への支援物資として海外から提供されたことで注目され、その後、日本でも販売の承認が得られることになりました。

災害時には、水道やガス、電気がストップし、お湯が確保できなくなることも考えられます。避難先で、ストレスから母乳が止まってしまう心配もあります。そんなとき、お湯で溶かす必要がなく、そのまま飲める液体ミルクがあれば心強いですね。常温で、紙パックは約6カ月、缶は約1年の保存が可能です。

ご家庭において、液体ミルクを紙おむつやほ乳瓶と一緒に備蓄してください。そして、ぜひ普段から液体ミルクを使ってみましょう。いざというときに備え、使用方法やミルクの味に慣れておくことも大切だからです。

もちろん！私も飲んでみましたよ！

